

樺太

望郷、私の樺太

岩手県 奥 瀬 勝 子

一 平和な日々

日本が、かつての日露戦争において勝利を得たことにより領有した樺太の北緯五十度以南が、いわゆる南樺太といわれたところで、終戦前にはこの南樺太を「我が日本の領土、樺太」と言っていました。

私は、その樺太で昭和二十(一九四五)年八月十五日の終戦の日まで、何の不自由もなく平和で穏やかな日々を過ごしていました。当時は、樺太における行政・文化の中心地は豊原で、樺太庁をはじめ国の諸官

公庁の出先機関は、ほとんどと言ってもよいくらい豊原市に集中していました。名実共に樺太随一の繁栄を誇っていました。

父の家族は青森県からここ豊原地区に、母の家族は宮城県から、それぞれ当時の国の政策に沿って移住し、樺太開拓の先駆者として希望を持って働いていました。逐次、移住民が増えてきて、豊原地区を中心に開拓していったそうです。ちょうど満州国の建国により、満蒙開拓の重要性が強調されて、満蒙開拓武装移民団とか満蒙開拓青少年義勇隊をはじめとして、内地から多くの開拓農民団が満州に移住し、開拓に精根を傾けていたのと同じようなもので、大変な苦勞をしたそうです。

昭和十二年八月に市制がひかれて、豊原市となりま

した。しかし、そこに至るまでの苦勞は並大抵のことではなかったそうです。酷寒の地で、まずは住むところから自らの手で作りあげていくのですから、それはそれは大変なことだったに違いありません。幸い私が生まれた大正十一（一九二二）年頃は、その先住者の開拓の苦勞も一段落し、日本の国力も勢いを増している最中でした。私の家もようやく安定し、これからさらに一層の繁榮のために努力をしているという、物心両面にわたって活気を呈していたよい時期であったのです。

豊原市は一年のうち半年以上は雪に埋もれていて、真冬には氷点下何十度という、今の若い人には想像もできない寒さで、すべてのものを凍らせてしまいました。当時を思い返してみれば、「よくもまあ、あの寒さの中で、あの寒い所で……」と感慨を新たにしてしまいます。それに反して短くて貴重な夏には、半年以上の塾居生活から開放されて、一斉に咲く花々の色鮮やかさ、美しさに圧倒されてしまって、あの寒さもいっぺんに忘れさせてくれるような気持ちになってし

まいます。スズラン狩り、真つ赤な実をつけるフレックブ摘みなどの情景は、半世紀以上たった今でも、まぶたにこびりついて離れません。

また話は冬に戻りますが、一面の銀世界、見渡す限り白一色の野原でのスキー、そして家の前にできたりリンクでのスケートなどは、幼児のときから慣れ親しんだ遊びで、いわば日常生活の中に溶け込んでしまっているようなものでした。スケート、スキーができれば冬の外での遊びは何もなく、まさに靴のようなものでした。これらは樺太でなければ味わうことのできない日常生活の一つで、そんな環境の中で私は少女時代を存分に過ごしました。

私の家は、現在で言えば小規模なデパートかスーパーマーケットのようなものを商っていました。小間物、衣料品、洋装小物などが、店内所狭しと並べられて、お客さんの出入りも多く繁盛をしていました。終戦近くなってくると、品物もだんだんと少なくなってきましたが、それでも配給品の呉服の反物とか服地などを売っていて、何とか商売を続けていました。店に

は番頭さんがいて、店内全体ににらみをきかせていて、店先には丁稚さんや小僧さんがいて、お客さんの相手をしていました。母屋には女中さんがいて、日常の洗濯、掃除から炊事までを分担していました。私の家族は、両親の他に義姉夫婦とその子供たち、それに内地から親せきの者が集まってきて、人の出入りもあって、それなりのにぎやかさも有り本当に平和で豊かな家庭でした。

私もだんだんと成長し小学校を終え、そのころ樺太全土の女子生徒の憧れの的であった、豊原高等女学校に入學しました。極端に短い春と夏の貴重な太陽光線を楽しむように浴びながら、日焼けすることなどには抵抗もなく日中一日、女学校のグラウンドで走り回っていました。豊原高女は、黒の上衣にブリーツのスカートというその当時でもモダンな制服で、胸にはスズランをかたどった校章のバッジをつけていました。その格好が若い女の子にはすてきに見えて、評判がよく懂れていたのです。全校で約千人の生徒がいました。私は当時、直線コースの百メートルを十三秒四

前後のタイムで走っていましたので、今でいうゴールドメダリストでした。二年生、三年生と進級するころにはバレーボールにも励み、キャプテンをしていました。少しでも時間があれば、すぐに練習に没頭していました。運動するときは、黒のリボン結びの半袖の白のブラウスに、ひだのたくさんあったブルマーをはいていました。もものところを少し開き加減にしていますが、それが当時ではせいぜいのおしゃれでした。

当時の女学生に対するしつけは、電気がついたら外出は禁止、友達同士で映画館に入ることなどとてもないことでした。校則や家のしつけは大変に厳しいものでしたが、私たちは当たり前のことと思っていましたので、別に不満もなく毎日を過ごしていました。学校から帰るとお腹が空いてベコベコでしたので、すぐに田舎饅頭や、粒あんのいっぱい詰まったきんつばなどの甘い物を口いっぱい頬張りながら、お店に置いてある朝顔型のラッパのついた蓄音機で、クラシック音楽を聴いていました。当時豊原でも蓄音機のある家はあまりなかったので、友達もよく聞きに來ました。

また、家で食べる饅頭やきんつばなどでは飽き足らずに、近くの外人さんが経営しているケーキ屋に行つて、三個十銭のドーナツ風のお菓子を買つて食べましたが、あまりのおいしさにたびたび通ひ詰めていたものでした。

あれこれ思い出すと、終戦の日までは樺太も豊原市もそして我が家も、本当に豊かで何一つとして不自由のない、平和で和やかな日々でした。終戦以後の日々と思ひ合わせると、懐かしくもあり悲しくもある思いが蘇ってきます。

二 ソ連の不法侵入

昭和十七年に、私は結婚しました。我が家の商売も順調で、安定した生活をする事ができていましたし、数十軒あつた家作からの家賃もあつたので、そろそろ店の建て替えと併せて、その機会にもう少し大きくするという話があつて、家族の話題はそのことが中心になっていました。私は、この非常事態にそんなことをしてもよいのかという思いで、躊躇する意見を述べていました。

昭和十八年の夏には、長女を出産しました。我が家も一段とにぎやかさを増してきました。しかし一方では、戦局もだんだんと不安な状況をもたらして、この樺太に一番近い戦場であるアツツ島の守備隊が玉砕という悲劇が報じられて、戦争が身近なものとなってきました。欧州でもイタリアが無条件降伏し、三国同盟の一角が崩れてきて、先行きに何となく不安な空気がひたひたと押し寄せてくるような憂鬱気になってきました。しかしこのころまでは、まだソ連はドイツと勝つか負けるかの戦いをしていましたし、日本とは不可侵条約を結んでいたもので、日本と戦争をするなどということは、想像もしないことでした。まさか米軍が北海道や樺太までも攻撃してはこないだろうと思つていましたので、将来を見通すと樺太が一番安全ではないかと、全ての樺太在住者は考えていたと思います。樺太在住者を頼つて移住してくる家族も、ぼちぼち現れたという話を聞くようになりました。

私たち女性は「銃後の守りは婦人の手で！」という合言葉のもとに、バケツによる消化リレーや、縄を編

んで作った火叩きによる消火作業などの訓練を始めていました。そのうちに訓練もだんだんとエスカレートして、竹槍でわら人形を突く突撃訓練までするようになり、戦争の空気はじわじわと豊原にも忍び寄ってきました。今になって考えれば、全くのナンセンスなお笑いぐさですが、当時は皆真剣そのもので、誰一人として批判する人はいませんでした。そのように日常の空気としては、戦争が一段と身近なこととなっていました。しかし、日常生活にはそんなに非常な事態とはならず、多少物資の不足が出てきましたが、我が家では商売柄まだまだ物が手に入り、不自由なことはありませんでした。

昭和二十年八月十五日正午、重大放送があるので、みんなラジオの前に集まって聞くように、との隣組の回覧板が回ってきました。何事だろうかと皆訝っていましたが、終戦の玉音放送だということは想像もつきませんでした。当日、家の者はラジオを前に緊張した面持ちで集まりました。「ガーツ、ガーツ」という雑音ばかりが聞こえてきました。皆は聞き漏らすまいと

して一生懸命に耳をそばだてていましたが、時々音がして何か勅語のような語調が聞かれました。その時はまだ、天皇陛下自らのお言葉であることは分かりませんでした。いったい何なのか判断もつかずにいるうちに、ラジオの放送は終わりました。家族や近所の人たちの話を冷静に聞いているうちに、天皇陛下のお言葉で、日本が無条件降伏をしたらしいということが、おぼろげながら分かってきました。日本は戦争に負けたんだ、これで戦争は終わったのだ、という悲壮感と安堵感が交互に交わり、何となく全身から力が抜けるようでした。何をする気も起こらず、虚脱感だけが残ってへたへたとその場に座り込み、しばらくは呆然としていました。「日本が負けるなんて！本土決戦とか神風が吹くとか言っていたのに……」と、外でどなり合っている人の声が聞こえていましたが、人々の心は何かほっとしたような、複雑な心境になっていたのも確かでした。私もその一人でした。これで、樺太は、豊原は、我が家は戦禍にまみえることなく、もとの平和な日々が送れるという思いでした。だれもがそのよ

うに思い喜び合っていました。想像もしていなかったことが、終戦後の八月二十二日に起こったのでした。

それは、終戦となったにもかかわらず連軍が樺太侵攻を開始し、幌内川ツンドラ地帯、安別国境、そして中央軍道正面の三方面から一方的に攻撃してきたもので、樺太の全住民は大混乱に陥り、戦禍を避けるためにあちこちと逃げ回り、被害を出したものでした。豊原では、全ての家の屋根や門口に、白旗か赤旗を立てるように指示がありました。これは降伏を表すものでした。このようにして、住民は恭順の意思を示したのですが、樺太庁の長官や国の機関の責任者などは皆連軍に捕らえられてしまい、また北緯五十度の国境方面からは、多数の人々が線路沿いに歩いて逃げまどっているなどの噂が飛び交い、人々は不安と恐怖のどん底に落ち込んでいました。役所の方からは、「とにかく逃げろ！」という指示が出ましたが、戦争が終わったというのにどこに逃げろというのか、どうしろというのかなどと、その指示には理解に苦しんで

いましたので、当面は無視してそれぞれの家に閉じこもっていました。しかし後で流れてきた話から、終戦後すぐに内地に向かう船を手配して引き揚げようと乗船した人々の船が、機雷に接触して瞬時に沈められて、ほとんどの人が海底の藻屑になったという惨事があったことを知り、不安な気持ちをいっそう駆り立てられました。

八月二十二日、不安な気持ちを少しでも和やかにと思って、父と廊下で庭の池の鯉を見ていたとき、「ドカーン！ ブッウォーン！」と地を引き裂くような不気味な音がしたと同時に煙が舞い上がり、廊下に立っていた私たちの足元が異常に揺れたのです。そばのガラス戸がぶるぶると震え、そのうちに猛然とした勢いで火の手が上がりました。私たちは、危険が迫っていることをとっさに感じました。「一体これはどういうことなのか！」と頭の中で自問自答していました。「つい一週間前、日本は涙をのんで無条件降伏をしたはずではなかったか」と、それだけを混乱している頭の中ではっきりと思えました。今まで経験のな

かった空からの爆撃だったのです。二次爆撃を避けるためにすぐ避難準備をして、必死になって丘の上に乗ってあった防空壕に向かいました。「ソ連機だ！」と誰かが大声で叫んだと同時に、耳をつんざくような大きな音を出したソ連の爆撃機が近づいたと思ったら、あっという間に私たちの後ろに迫ってきました。母が、やっと二歳になった長女の手を一生懸命に引っ張って走っていました。私は臨月に近い大きなお腹を抱えて必死でした。すぐ後ろに爆撃機の音がするの
で、慌てて両耳を押さえてその場に腹ばいに伏せました。「ポワッ！ポワッ！」と右手の方で何かを叩きつけるような音がするので薄目をあけて見ると、土砂が「ポッポッ」と割れるような感じで点々として前に進んでいました。何だろるかと思っても、恐怖心で考える力もありませんでした。爆音が少し遠のいたら、やっと機銃掃射だということが分かり、すぐに「走るわよ！」と言いながら体を起こして、娘を横抱きにして母の手を引っ張って向こう側に走りました。土手の下でちょっと息を潜めて気持ちを整えて、今度はその

向こうの樹林の中に入り、次いで草むらの中に伏せて、やっと防空壕へ転がり込みました。私たちを狙ったソ連機は、かなた山の方に行ってしまいました。「助かった！」と、私は実感を込めて叫びました。しかし再びソ連機が戻ってきて、この防空壕を目がけて機銃掃射をされたならば、これで一生の終わりになってしまふだろうと思うと、冷や汗が背筋を流れる思いでした。

四十数年の間、多くの人々の汗と涙により築き上げられ、そして繁栄した樺太の町々が、こんな無茶なやり方で再びソ連のものになるのかと思うと、無性に腹が立ちました。「日ソ不可侵条約はどうなっているのか！ソ連という国の火事場泥棒的な行為は許されるべきでない、国際法違反ではないか」とか、「戦争に負けるということはこういうことなのか！」などというろいろ考えてしまいました。

三 丘の上の壕

危険な状態がまだ続いているので、我が家に戻ることもできずに、この丘の上の防空壕で当分は起居する

ことになりました。親せきの人たちも集まってきて十人ぐらの生活でしたが、いろいろな事情であまり長くは続きませんでした。そして、その間に見聞したことは悲惨なことばかりでした。

豊原駅は爆撃されて、引揚列車を待っていた人たちが、約九十人の犠牲者が出たそうです。また、北樺太との国境近くにはいた人たちは、言葉では言い表せない苦難に満ちた、悲惨な逃避行をして南下してきたとのことでした。その数に差はあるものの、満蒙国境から着のみ着のままに逃避してきた人たちなどと、まったく同じ状態だったと思います。私たち家族は、幸いにも命は助かったものの、あの不気味な機銃掃射の連続音は一生耳から離れるものではありません。全く何とということでしょうか。終戦になった後で、まさか背後からソ連軍に襲われて、一番の弱者である老人、女、子供が殺されるなんて……。腹立たしさと、悔しさと悲しみの入り交じった気持ちの高ぶりを抑えることができず、ただ私は手を合わせて祈らずにはいられま

せんでした。

その夜、豊原市街の火災で空が明るくなった丘の低いところに、皆が集まって市街を見ましたが、眼下に見える火の海の豊原市街は火を消す人もなく、なすがままに燃えていました。何もかも灰燼と化してしまったあの美しい街並みを思い出しながら、茫然自失でため息をつくだけでした。そのとき、横にいた父が、「ああ！ 一生掛けて残した財産が燃えていく。あの辺りには家作がずうっと並んでいるのに……」と、ぼつりとつぶやいて燃え盛る炎に目を凝らしていましたが、そのときの情景がいまだに鮮明にこびりついていきます。

四 燃え残った我が家へ

幸いにも我が家は燃えなかったのですが、全体に落ち着きに戻りつつあるのを見届けてから、全員で我が家に戻ることとなり、丘の上の壕を出ました。しかし、家に戻ったからといって不安が解消されたわけではなく、ただ戻れる家があったから戻ったというだけのことでした。親しかった人たちの消息も全く分かりませ

んでした。果たして内地に帰れるのだろうか、もし帰れるとしても、それは確率の低いかけのようなもので、命の保障などはないと同じでした。ままよ、死ぬときは家族もろ共だと話し合っていました。そんな憂鬱気の中で、「今まで通りの生活に戻るように」との指示が伝えられ、取りあえず我が家に戻って、一応落ち着くことにしようとのことで戻ったのです。

しかしソ連軍の侵入は後を絶たず、住民を不安に陥れていました。ソ連兵の略奪行為は当たり前のことのようになってきました。市街から少し離れたところでは、殺人、婦女暴行と悲惨極まりない野蛮な行為が日常茶飯事のように起きていると聞きました。女、子供は外出を避けるようになり、我が家でも父がバザールに出掛けて、物々交換をしていました。男性は「ベチカ、ラボータ」と言われて、煙突掃除や雑役夫として雇われて多少のお金を稼いでいました。私の夫もその一人でした。そのうちにソ連軍側も少しづつ落ち着きを取り戻し、治安も段々と良くなってきました。無謀な行動をとっていたソ連兵に対しての処罰も、非常に

厳しくなりました。これらは、日本側の代表が強力に要求したからとのことでした。

慌ただしい月日が瞬く間に過ぎて、厳冬の季節となり、寒さが身にこたえるようになったころ、私は二番目の子供を出産しました。女の子でしたが、産後の肥立ちも良くて母子共に健やかで、さほど取り立てるような苦勞もなく、家族が肩を寄せ合って生きていくだけの物資もあって、ごく普通の暮らしをしていました。しかし、依然として内地からの情報は途絶えたままで、いたずらに流言飛語だけが飛び交い、先の見えない日々が無情に過ぎていく有様でした。

その頃からソ連側は思想教育を始めて、在住する日本人に対して、ソ連国籍を取得して樺太にとどまることを熱心に勧め、かつ奨励する運動を開始しました。

五 女の心意気

昭和二十年も暮れようとして、寒さは一層厳しくなってきました。日本にいつ帰れるのか、そのめども立たずに希望も薄れてきた私たち家族は、昼でもどんよりと暗く垂れ込める雲と、北風にあおられながら容

赦なく吹きつける雪を、ただぼんやりと見ている日が続いていました。そんなある日、サクサクさくさくと降り積もった雪を踏みしめながら一団となって行進する、捕虜となった日本兵の姿が目飛び込んできました。両側には、監視のソ連兵が厚い生地の外套に身を包み、いかつい肩には鈍い光を放っている自動小銃を掛けて、鋭い眼差しで歩いていました。おそらく何かの作業が終わって、收容所に戻る途中ではなかったかと思いますが、その日本兵たちを眺めると、皆一様に顔が血の気のない灰色か土茶色をしていて、目はくぼみ、体全体には生気がなく、これが一年前には精強を誇った日本軍かと疑いたくなるような姿でした。満足な食事も与えられず、そのうえ過酷な労働を強いられているのだろうと、かわいそうな気持ちになりました。ソ連兵の着ている外套とは対照的に、生地薄い粗末な日本軍の軍服は、体にまとわりついているような感じで、ガタガタと震えているようでした。それを見た母は「何ということかぁ！」と大声を出して、店にあった行李を引っ張り出してきました。そして詰め

込んであった軍手や軍足やシャツ、袴下などを取り出して、日本兵に渡し始めました。本来ならばこんな行動は許されなかったことかもしれませんが、母はそんな後先のことなど考えず、ただ目の前の兵隊の姿に耐えられずに、監視のソ連兵がいるのにもひるまずに渡していました。すぐに身の丈が母の倍ほどもあるソ連兵が、大声でわめきながら銃を構えました。母はその銃口の前にびたりと座り、そのソ連兵に向かって両手をつき「助けてあげてください、どうかこれを渡してください」と、涙を流しながら哀願しましたが、言葉が当然全く通じないソ連兵も、母の何者をも恐れないような剣幕にびっくりしたのか、見て見ぬふりをしてそのまま元の場所に行ってしまった。母は、「頑張ってちょうだい、頑張ってね」という言葉を繰り返しながら、一人一人の手に渡しながら泣いていました。受け取った人も、その光景を見ていた人たちも、そして私も、皆涙を流しました。別のソ連兵が寄ってきて、行李をそこに置いて戻れというようなジェスチャーをしたので、母は汲々家に戻りました。

その夜は、母はあまりしゃべりませんでした。自分の行為に納得したのか、またはあまりにも唐突な行動に神経が高ぶってしまったのか、どちらか分かりませんでした。私は勇気ある母に頭の下がる思いでした。あれほど頑固者で気の強い父も、それとは反対に温和で優しい性格の主人も、そして私も家族の皆にとつても、母のとつた行動には腰が抜けるほどびっくりしてショックを受けてしまったので、その日は夕食もそこそこに寝込んでしまいました。しかし床に入つても、「赤紙一枚で召集され、お国のために命を捧げようとした人たちが、負けて捕虜となるとこんなに惨めな有様になる。これではあまりにも無残だ！」と思いました。皆もそんな気持ちでした。そして母のあの度胸と情け心の深さ、それに加えて、日頃はその片鱗も見せたことのない勇気には、明治女の心意気を感じずにはいられません。

六 ソ連の友達

何のかんと言いながら、あの敗戦から二年が過ぎてしまいました。自宅に住みながらではありません

が、抑留者という身分には変わりありませんでした。しかし、抑留者といっても、日常周辺の行動はあまり束縛されずに比較的自由に過ごせましたが、やはり気持ちのうえからはあまり自由奔放なことはできずに、窮屈な日々を送っていました。周囲にはいつの間にかソ連人の家が次から次とできて、いや応なしに日本の樺太からソ連の樺太に様変わりをしていました。どんなに思想教育をされても何を言われても、やはり日本人である私たちは、日本に帰れることのみを望んでいましたし、その日の来ることだけを希望に過ごしていました。そんな雰囲気でしたが、そこはやはり人間で、敵同士ではありながら一つの街中で身近に暮らし始めると、いつしか気持ちを通うもので、親近感がわいてお互いに理解しようという気持ちも大きくなってきました。ソ連の人たちも同じように考えていたようです。

たとえ目の色、肌の色、そして話す言葉に違いがあるとはいえ、心を開きお互いに向き合おうという姿勢が見られるようになれば、そこに人間関係が生じてく

ることを感じました。片言のロシア語と、片言の日本語にジェスチャーを交えての会話で、あるソ連人家族との付き合いが始まりました。その一家は親切で、とても心根の優しい人たちでした。ヤーシャさん、トリーヤさん、そしておばあちゃんとルーダちゃんという一家でしたが、いつも砂糖、パン、缶詰それにお菓子などを持ってきて、私たちの家族と楽しく語り合っていました。ときにはお風呂に入りに来て、夕食のカレーライスをおいしい、おいしいと言って食べて帰るというような交わりでした。子供たちは子供たちで、勝手にお互いの母国語でしゃべりながら、通じているのかいれないかは分かりませんが、それでも楽しそうに、仲良く遊んでいました。

敗戦からこのかた一日一日を生きるために、売り食いの生活でしたが、私の家は商売をやっていたため、街の中心部にありました。そのため、ソ連兵によるあの無惨な略奪、暴行などにもあまり遭わずに、しかも商売をしていたときの残りの品物もあって、バザールに行つては必要品の物々交換をしていました。敵国

人といつても、ひどいのはソ連兵であつて、民間のソ連人はそんな無茶苦茶な横暴はしないようでした。

このソ連人一家は、私たちの引揚げが決まり引揚列車に乗る通知がきて、樺太をいよいよ離れるというときにも、たくさんの食糧を届けてくれて、「元気で無事に帰り着きますように」と言つて見送つてくれました。長年我が家で飼つていた樺太犬は、その家族に引き取られてかわいがつてもらえることになりました。今でもあの家族は元気でいるだろうか、元気ならば一度会いたいものと思います。繰り返し鳴き声をあげながら、後を追つてきた愛犬の声と、それをじつと見守つていたあの家族の温かい人情は、今でも私の頭から離れません。

七 収容所生活

そのころ内地では、物資が極度に不足しているというニュースが耳に入り、帰国するときは少しでも多くものを持って帰りたいと考えるようになりました。例えば子供を背負う帯は、着物をほどいて紐状にして作り、綿入れねんねこは綿を抜いてその代わりに羽織

を広げて入れました。リュックサックも丈夫な布地で作り、ポケットもみんな共布を使うなど、知恵をしぼり頭を使って、一枚でも多く持って帰る工夫をしました。

いよいよ帰国についての連絡があり、荷物をまとめて豊原駅に集合し、真岡に行き、真岡から引揚船に乗るということでした。それぞれが荷物を背負えるだけ背負い、両手に持てるだけ持って駅に集合しました。

列車の中は、身動きもできないぐらいにぎっしりと混んでいて、重そうな音をたてながら出発しました。当時ループ線と呼ばれていた豊真線は、トンネルを出たり入ったりしながら四時間以上もかかって走りました。便所も行けず、子供は窓から、大人は列車の床板を割ってその隙間から用を足しました。冷たい風が、あつちの隙間こっちの割れ目から「ヒューヒュー」と吹き込んできますが、誰も文句を言わずに無言で、ただ日本に帰り着くことだけを願っていました。

真岡にやっと到着しましたが、そこからすぐに船に乗るわけにはゆかず、まず収容所に入れられて、日本

からの引揚船を待つことになりました。収容所は小高い山の中腹にあって、皆は収容所内の建物に分散して収容されました。子供の手を引き、荷物を背負い、さらに手にも荷物を持って歩きました。しかし、収容所の見える山の下まで行ったとき、びっくりしました。坂は急で、荷物を持ってはとも歩けない所でした。

身一つでも大変な所でした。どの家族も、せっかくなこまで持ってきた大事な荷物を麓に置き捨てていました。我が家でも、母に赤ん坊を背負ってもらい、長女は本人の気に入っている赤いリュックサックに、おやつと一番大事にしている人形を入れて背負い、父と主人と私が最小限に必要な物だけを背負い、必死になって登っていきました。その日は、四月だというのに小雪のちらつく寒い日でした。登ってみると、そこは高台のグラウンドでした。そこから右手に海が、左手には市街地が見えました。ふと今登ってきた麓を見ると、置いてきたたくさん荷物をソ連兵が運んで行く姿が見えました。やがて日が暮れて収容所での第一夜がきましたが、ここで何日暮らすのだろうかと思いな

がら、硬い板敷きの上でうとうととまどろみました。

食事は高粱のお粥でしたが、小さなバケツを一つ持っていたので大変に重宝しました。洗顔、洗濯、食器洗い、そして食べ物の受け取りなど、全てそのバケツ一つで用を足しました。もちろん消毒などすることはありません。便所は、収容所からさらに登っていったところに穴を掘って板を渡したただけでしたが、そこに一度に何十人かが用を足せるようになっていました。吹きさらしですので、病人や体の弱っている人はさぞ大変だったことと思いましたが、どんな場合でもとにかく生きて日本に帰らなければというそのみの気持ちで、苦勞も苦勞と思わずに過ごしました。

今まで豊原では、戸も窓も三重に囲われていて、一日中暖かいベチカでの生活でしたので、この板敷きの隙間風は本当のところ辛いものでした。

八 さようなら！ 樺太

何日ぐらい待機していたのか、短かったのか長かったのかも分からなくなっていました。時間の流れが異常に長く感じられたのは事実でした。

昭和二十二年四月九日、とうとう引揚船に乗船することになりました。もう欲も得もなく、一日も早く船に乗りたくて、うずうずしていました。ソ連兵が監視していたので、嬉しさを顔にはあまり出さないようにとか、こそこそ話し合うな、などと言われて喜びをひた隠しにしていますが、それでも日本に帰れるという喜びを誰も隠すことはできませんでした。

収容所から乗船場に向かっているとき、どんな理由があつたのか分かりませんが、数人の男性がソ連兵に連れ去られるのを見ました。せっかくここままで思いながら、胸の高鳴りとは裏腹に遅々とした歩みでした。ソ連兵と目を合わせないようにうつむきながら進みました。乗船までの長かったこと、千里も歩いている気持ちでした。

すし詰めの船底の船室に落ち着くことができました。しかし出航するまでは、安心できずに気を張りつけていました。やがて、「ポーツ、ポーツ」という汽笛の音が響きました。エンジンの音が船内を揺らし、静かに滑り出しました。いつどんな難癖をつけて連れ

戻されるか分からない不安からやっとな解放されて、皆

はほっと安堵の気持ちになりました。皆しばらくは気が抜けたようになっていましたが、そのうちにその喜びは全体を駆けめぐり、開放感に浸り、一斉に甲板に上がって行きました。私も、娘の手を引つ張って人々をかき分けながら甲板の手すりにもたれて、段々と遠ざかる真岡の港を見つめていました。私の視界から少しずつ遠のく樺太を、万感胸に迫る思いで眺めているうちに、人目もはばからずに「さようなら！ さようなら！ 有り難う、私の故郷樺太よ！」と泣き叫びました。もう二度とこの地に足を踏み入れることはあるまいと思うと、涙が次から次と出てきました。父母はこの地で四十年、一代で築いた汗と涙の結晶である全財産と、数えきれないいろいろな思い出を残して行くその気持ちはどのようだろうかと、父母の姿を見ても、涙が出てきました。私たちは、まばたきするのも惜しい気持ちになって、視界から消えていく樺太を見つめていました。

九 そして、今

昭和二十二年四月二十四日、ついに待ち望んでいた函館港に着き、日本に帰ることができました。日本では新円切り替えとかで、持って来たお金は全部紙切れ同然となり、それこそ裸一貫、着のみのままの生活を物置小屋から出発しました。引揚者の苦労は、海外のどこから引き揚げてきた人も皆同じで、それぞれにその再出発は大変な苦労だったと思います。

樺太四十万人の財産は敗戦によって全て失いましたが、あの土地が生み育んだ高度な文化や経済の香りは、今でも私の人生の中で確実に生き続けています。戦後五十数年を経た年月は、引揚者という言葉が死語にしつつあり、引揚者を理解できない若者が多くなってきました。でも、命のある限り私にとっての樺太は、大切な心の故郷であり、そこで培われた高い精神性や育まれた深い友情は、紛れもなく「私の永遠の宝物」です。戦中、戦後の苦労に耐えて、生き残った同郷人、そして同窓生、同級生は日本各地に居住して今でも温かい交流が続いていますし、生きている限り続

く友情であると思っています。